

入れ札

菊池 寛

内容理解

この文章で作者は、くにさだちゅうじ 国定 忠次の子分との別れに材を取り、入れ札に際しての心理を描こうとしている。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

◇ 赤城山も見収め

・上州岩鼻の代官を斬り殺した忠次一家は、赤城山を退き、信濃路へと落ちていく。榛名山を越え、¹ である大戸の御番所を過ぎ、振り返って赤城山を見出だす。「赤城山も見収めだな。おい、ここいらで一服しようか。」

・忠次は、自分の始末に心悩ませていた。子分が今は十一人、この人数での他国の横行は難しい、かといって一人も困る。心の内では、同行の三人は決まっている。それでも、自分のため、命を捨ててかかった者たちに、甲乙をつけることはできなかった。忠次は、別れるなら、いっそ皆と別れようと思った。

◇ 入れ札

・みんなを集めた忠次は、「俺おれこれから、一人で落ちていく。子分に² はつけたくねえ。百五十両の残り金を分ける。忠次が捕まって江戸送りになったと聞いたたら、線香の一本も上げてくれ！」と元気に言う。

・大間々おおまの浅太郎、「そりゃ、親分悪い了り簡かんだろうぜ。お前さんの大事な場合だ、お前さんがこいつだと思う野郎を、名指しておくんせえ。」浅太郎の言い分にみんな³ を表す。忠次は、この大事な場所で彼らを名指して、彼らに対する信頼の差別を、露骨に表すことに、気が進まなかった。沈黙が続く。

・釈迦しやの十蔵じゆ「籤引きくじびがいいや。」第一の大力の嘉助が、すぐ反対した。「くだらねえ⁴ なんかしねえで、一言、嘉助についてこいと、言っておくんさい。」

語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

手頃 (三〇二・上10)

既定 (三〇七・上13)

勘弁 (三〇九・下6)

心根 (三一・上8)

・松井田の喜藏「駆け引き万端の軍師がついていねえことには、どうにもならねえ。」

闇雲の忍松が「一命を捨ててもいい」と言いかけて、皆が「命を投げ出しているのはお前だけじゃねえ」と罵る。忠次は、ふと、自ら選ぶことなく、最も優秀な子分を選び得る。5
を
思いつく。「入れ札をして、多い者から三人を連れて行こう。」

◇ 『くろすけ』

稲荷の九郎助は、出入りでしくじった後、声望を落としていた。

自分に入れるのは、同じような境遇の弥助だけだろう。年頭の自分が入れ札に落ちれば、自分の信望がないことが現れる。6
な寂しい感じに堪えられなくなる。筆を渡

した弥助がニヤリと笑う、『お前に入れたぜ。』と言わんばかりに。後の一枚がどうしても欲しい。その一枚が、自分の生死の境、7
の境であるように思われた。仮名で『くろすけ』と書き投じる。後悔した。耳のそばで、『賭博は打つても、卑怯なことはするな。男らしくねえことはするな。』と怒鳴る忠次の声が響く。

◇ 九郎助が一枚

読み上げれば、九郎助は一枚。忠次は、三人を連れて去る。九郎助は、落

選した8

よりも、自分の浅ましさが、骨身にこたえた。途中まで付き合うとい

う弥助が、「お前の名をかけたのは、この弥助一人だと思うと、俺ああいつらの心根が、全くわからねえや。」と言う。9
を平気で言う弥助でさえ、自分があんな10
ことをしたとは思っていない。九郎助は自分で自分が情けなくなつた。

主題

この作品で作者はどのようなことを描こうとしたと思われるか、次のことに着目して、百字程度でまとめてみよう。
〈着目点…『くろすけ』と札に書く心境〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・菊池寛とは、どのような作家だったか。

・国定忠治とは、どのような人物だったか。

・国定忠治は、演劇・映画などで、どのように扱われているか。

100